

絵画にみる都市と近代化

—— 鈴木栄太郎による「都市結節機関説」を参考に ——

大 塚 晴 郎

要 旨

本論は芸術社会学の立場から、社会学の研究における絵画という非言語的資料の有効性を探るための一つのトライである。

—— ここでは社会学の主要な研究課題の一つである「都市と近代化」の問題について考えてみることにする、それらの研究には西欧の学者、評論家によるものも多い、その場合は必然的に当時の西欧を対象にしている。

現在の我々には残念ながらその対象について具体的にイメージしにくい部分が多い。幸いにも西欧の当時の状況を描いた絵画の名作がある。これらの作品を通してそのギャップを幾分でも埋められないものであろうか…… ——

はじめに

今日までの社会学の研究の殆どは言語的資料や、言語による調査研究に基づくものであるが、絵画という非言語的資料を利用して、従来の言語的資料に見られないイメージ豊かな研究が出来ないかという個人的な関心と、この機会にこうした非言語的資料を中心に西欧の「都市と近代化」について考察してみたいというのが本論のねらいである。

まず絵画という非言語的資料の意義と、社会学におけるその利用の困難性については、既に倉橋教授が「芸術社会学とはどのような研究か」（「芸術社会学序説」晃洋書房刊 1997年 第1章）において明らかにされている。したがってここではその問題については省略するが、教授が指摘されるように非言語的芸術を言語によって説明しなければならないという矛盾があることは認めねばならない。

次に西欧の都市に焦点をあて、しかも何故近代化かということが問題になる。もちろんそこには個人的関心が大きいことはいうまでもないが、いまモダニティの問題とも関連して、近代化が改めて問い直されているとともに、近代化を象徴するものの一つとして都市化、の問題があることも関係している。また都市の現在というよりも都市の近代化を対象とする方が、歴史的経過の中で、非言語的資料の有効性がより明確化されるのではないかという思いもある。

勿論西欧の近代は、新古典主義、ロマン主義、写実主義さらに印象主義・象徴主義・後期印象主義などの美術史上の黄金期であり、また社会学も近代とともに誕生した学問と言われる点も見逃せない。そこには近代と前近代との差異性を問題にする研究も多いし、近代化の出発点としての科学的意義も大きい。

ところが近代を何時から捉えるかについては意見が別れる。資本主義を前提とする経済的視点、民主主義を前提とする政治的視点、市民社会を前提とする社会的視点、科学、技術の発展や、合理主義的思想を基軸とする文化的視点などがある。そこには当然違った解が生まれる。結果は15世紀以降の宗教改革から、20世紀初頭の文化変容まで研究者の捉え方はまちまちとなる。論理的に考えるということは別の立場から厄介な問題がある。

(1) 都市と近代

ここでは西欧の「都市と近代化」について問うことになるので、次に都市について考えることにしたい。社会学には都市社会学という領域があり、従来から多くの研究成果がみられる。代表的なものには、アメリカ・シカゴ学派を中心とする生態学的研究があり、都市を人口の集中する空間という視点から捉えてきていた。その中でもパーゼスが1923年に発表した同心円地帯理論 (theory of concentric circular zone) や、ホイットの扇状理論 (sector theory)、ハリス&ウルマンの多核心理論 (multiple nuclei theory) などが有名である。またL・ワースの都市的生活様式論、C・S・フィッシャーのアーバニズムの下位文化論が内在的批判の形でそれに続く。また別の流れとしてシカゴ学派を外在的な立場から批判するM・カステルを中心とする新都市社会学の立場や、L・マンフォードの都市文化論も見られる。こうした諸理論の競合の中にあっ

て、独自の研究分野を開拓していると思われるものに鈴木栄太郎の都市を結節機関の集積地と規定する「都市結節機関説」がある。（鈴木栄太郎著「都市社会原理」第3章 都市の機能 95頁～145頁 未来社刊 1969年）

ここでは氏の見解を参考に「都市と近代化」について絵画作品を中心に見ることにしたい。

氏によれば「都市を村落より区別するものは、文化的社会的交流の結節機関の存在の有無であり、都市の大小を決定するのもまたかくのごとき結節機関の存在の量と規模である」（同著 412頁）としている。結節機関とは人、モノ、情報の社会的・文化的交流を結節させる機能を有する機関であり、彼は具体的に以下の9種の機関を掲げる（同著 141～142頁）

A) 封建時代から今日にいたるまでその機能を存続している各結節機関

- a) 商品流布 — 卸小売商, 組合販売部
- b) 国民治安 — 軍隊, 警察
- c) 国民統合 — 官公庁, 官設の諸機関
- d) 技術文化流布 — 工場, 技術者, 職人
- e) 国民信仰 — 神社, 寺院, 教会

B) 近代都市において大きく浮かび出てきた各結節機関

- f) 交通 — 駅, 旅館, 飛行場
- g) 通信 — 郵便局, 電報電話局
- h) 教育 — 学校, その他各種教育機関
- i) 娯楽 — 映画館, パチンコなど

とくに注目すべき点は、これらの機関が単に都市に人を集めるという生態学的な視点だけでなく、その活動を通じて多数の人々に関与しているという構造・機能的な視点が用意されているということにある。またこうした機関はその上下関係によって格位があり、それにもとづく都市序列が生まれるという都市格位説と結びつく。また就学、就業期にある人々を対象とする正常人口による、社会生活の存続が可能な正常生活説など独自の理論を展開されるのである。こうした鈴木氏の研究に対して機関の概念規定そのものの曖昧さ、結節機関系の相互関与関係の分析の欠落、機関別の立地に関する分析の欠落などの問題を指摘する意見も紹介されている（神谷国弘「都市的機関論再考」関西大学社会学

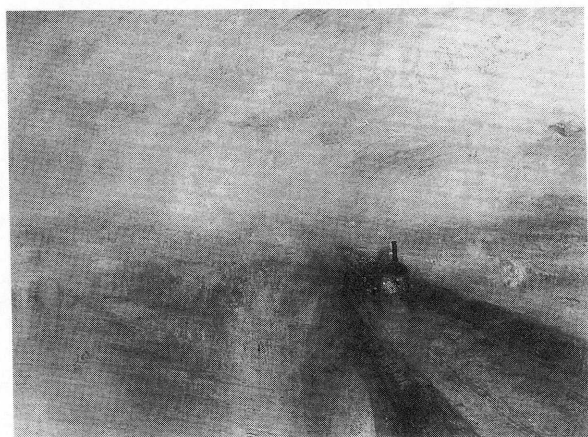
紀要第7巻第1号参照)。しかしここでは鈴木氏の研究に対する分析的な批判は置くことにして、氏が結節機関として掲げられた9種のうち、とくに近代都市において大きく浮かび出てきた4種の機関についての西欧の事情を、当時描かれた絵画から知ることしたい。

(2) 交通の結節機関

(a) -W・ターナー <雨・蒸気・速度——グレート・ウエスタン鉄道>-

以上の論議から離れても、私には近代の始動を感じる一枚の絵がある。ジョゼフ・M・W・ターナーの「雨・蒸気・速度——グレート・ウエスタン鉄道」(資料1)である。雨と蒸気で朦朧とした大気の中を蒸気機関車がこちらに向かってくる。それはかなりのスピードである。この作品でターナーは絵画史上初めて「速度」を描くことに成功したと評価されている。蒸気機関車は異常に煙突が高い。それは高らかに産業革命の成果を誇示しているようにも見える。その作品には既に光に対する思索も見える。印象派の胎動はもうそこまで来ている。背景の前近代的世界は遠くに霞み、列車は手前の二十世紀を越えて幕進してくるようにも見える。画面全体は明るいながらも不透明である。幻想的ではあるが不安感もある。近代初頭の姿が集約されているように思える。

蒸気機関は産業革命の成果を高らかに誇示するものの一つである。ワット(1736~1819)の蒸気機関開発は有名であるが、その陰に資金、技術面でのマチュー・ボルトン



(資料1) ジョゼフ・M・ターナー
 <雨・蒸気・速度——グレート・ウエスタン鉄道> 1844年
 (ナショナル・ギャラリー ロンドン)

(1728～1809)の協力が大きいといわれる。彼等は提携し共同で1773年に特許をとっている。既にこの時期以前から特許制度が存在し、結節機関としての国民統合が有効に機能していたことが分かる。ボルトンは揚水以外にも紡績、製粉、鉄鉱及び各種鉱山などの機械を駆動するための原動機の必要性を予測し、ワットに汎用性のある回転機械の開発を勧めたと言われる。蒸気機関による揚水技術の開発により、山間の溪流近くに建てられていた工場が、平地に移され、工業都市が平野部に誕生した。結節機関としての技術文化流布が、都市開発に有効に機能していることが分かる。

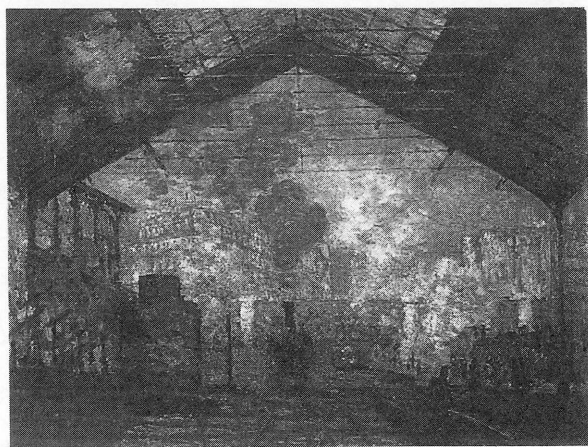
19世紀になってワットの31年間にわたる特許も終わりを告げ、その制約が解除されるのを待ち兼ねたように新たな蒸気機関の進展が見られる。蒸気機関は揚水、工場動力から、新たに交通、運輸用へと広がった。1802年のトレヴィシックの自動車、1804年の軌道上の蒸気機関車、1807年のアメリカのフルトンの蒸気船、1884年のC・パーソンズ(1854～1931)の特許による蒸気タービンなどの出現である。

なおこのターナーの作品が生まれたのは1844年。面白いことにこの頃社会学の始祖の一人とも言われるH・スペンサー(1820～1903年)は鉄道会社に入り土木技師として活躍している。ターナーの描く蒸気機関車の運行に関係していたかも知れない。その解明は社会学史家に任せることにしたい。当時は技術開発の成果を、生産の場で早急に活用することこそが焦眉の課題であった。生産のための資材や、生産物の運搬は急がれ、鉄道は時代の花形とまではやされた。しかしやがて鉄道ブームも沈静化した。スペンサーも職場を去った。彼はその後1848年に「エコノミスト」誌に入り、1853年以降叔父の遺産を相続し、職に就かず著述に専念したと言われる。スペンサーは「社会進化」を予測した。近代に陰りを見いだしたG・ジンメル(1858年～1918年)や、M・ウェーバー(1864～1920)はまだ生まれていない。しかしターナーの絵の中に近代初頭の新しい時代に対する大きな期待と、いずれ生じる苦悩が予感されているようでもある。

(b) クロード・モネー <サン・ラザール駅>—

クロード・モネーのサン・ラザール駅を描いたこの作品(資料2)は1877年

のもので、彼はこの外にも同駅を幾つか描いている。ガラス張りの巨大な駅の構内に白い蒸気と煙を吹き上げる蒸気機関車。駅付近には幾つかのビルがみえ、都市の様相を呈している。この駅から印象派のたまり場のカフェ・ゲルボアが近いと言われる。都市におけ



(資料2) クロード・モネー 〈サン・ラザール駅〉1877年
(オルセー美術館 バリ)

る結節機関として交通、駅の意味については改めて詳述する必要性もないであろう。西欧では17世紀ごろからコーチという駅馬車が発達したが、道路事情が悪く時間も要し、結節の意味から問題があった。蒸気鉄道の出現は交通面から近代都市形成に大きく機能したと思われる。

なおこうした産業化、技術化の進展が西欧の都市の近代化に深く関係している点は都市社会学の視点から興味のあるところであるが、芸術社会学の視点からはこうした近代の所産を芸術家が、芸術の対象として選んでいる点が注目される。倉橋教授はその著「絵画社会学素描」(晃洋書房 1991年)において、自然美に対する人口美の認識、人間の所産を芸術の対象に選択するということは、「人為の人為とでも言えることであり、絵画の歴史において極めて重要な意味をもつ」(同著 230頁)とされている。なお同著においてはピサロの機関車の絵「ロードショップ・ステーション、ダリッジ」(1871年)、「機関車、ベドフォード・パーク」(1897年)とともに、マルケ「ハンブルグの港」の蒸気船の紹介がなされている。海運そのものは歴史も古く、古代からみられるところであるが、蒸気船はまさしく近代のものといえる。「泰平のねむりをさます正喜撰(蒸気船) たった四はいでよるもねむらず」は、まさに日本の近代の曙といえよう。

(3) 通信の結節機関

—ファン・ゴッホ 〈郵便配達夫ルーラン〉—

18世紀からイギリスでは郵便馬車（メール・コーチ）が活躍していたが、19世紀半ばに至り郵便輸送面でも鉄道がその主役となった。ローランド・ヒル（1795～1879）が郵便改革案を発表、料金を全国均一にし、基本料金を一律1ペニーに、またそれまでの料金後払い制を、前払い制に改めるよう提案、1840年1月から実施されたという。ここに近代的な郵便制度が誕生したことになる。ヴィクトリア女王が描かれた世界初の切手「ペニー・ブラック」はその時考案されたものである。ゴッホの「郵便配達夫ルーラン」（資料3）は1888年の作といわれる。ゴッホは人々の嘲りや、無理解に悩みながらの生活であったが、この郵便配達夫とは長年の友情に結ばれていたと言われている。ルーランは金の飾りの着いた青い制服を身に付けており、すでにこの頃から郵便事業が制服をまとう公的性格を認められていたことが分かる。制服はファッションを対象とする文化社会学の立場からも興味のあるところである。ゴッホがこのひげをはやした郵便夫の威厳ある姿を肖像的に描いたことは、彼のルーランに対する心情をよく現わしている。

当時の郵便は新聞普及にも大きく貢献したと言われている。当時村の郵便局の前には新聞を待つ人が必ずいたと言われている。郵便が情報、モノ（商品や金融）の面からも結節機関として既に機能し、ひととひととを結んでいたのである。人間の直接的接触から、手紙



（資料3）ファン・ゴッホ
〈郵便配達夫ルーラン〉1888年

（ボストン美術館）

という媒体を通じての間接的接触が、システムの形で運営されるようになった意義は大きい。

(4) 教育の結節機関

ージョン・ペロー <リセ・コンコルセの下校風景>ー

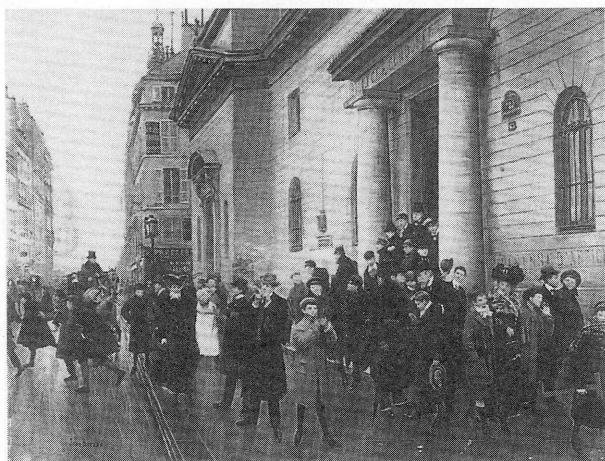
国家が近代国家としての体裁を整えていく上で、学校教育は絶対不可欠のものの一つである。

フランスでは第三共和制下の1882年に13才までの子女に就学義務が課せられた。その後1936年に14才、1959年に16才まで延長され、制度化とはほぼ前後して教育の無償制が取り入れられている。子供の社会化にとって学校が極めて重要な集団であることは、改めて言うまでもない。T・パーソンズは学校を社会化の機関とし「規律づけられた遂行によって、限定的目標を達成しようとする組織の原型」としている。人間はこの世に生を得て以来家族、仲間集団（peer group）を経て、学校に至り、やがて職場集団に吸収されていく。この過程の中で学校は子供たちを家族の生活から定時的に隔離し、無限定的な家族の愛着から脱出する機会を提供するのである。子供達は仲間集団や、学校の中で自ら一定の地位を占め、限定的にそれに応じた役割を演じることになる。また子供達はそれぞれの集団に所属することによって、集団独自の下位文化を順次内面化する。またその下位文化を包括する全体社会の文化をも内面化してゆくのである。この内面化と役割取得による社会化は自立への一歩であり、アイデンティティの確立にもつながる。また自己だけでなく、相手の立場を理解しうる人格を形成することも望まれる。そのためには子供たちを社会化の低次元から、高次元に引き上げようとする努力が必要である。そこに多かれ少なかれ社会的統制と同じメカニズムが働くこともあるが、子供の成長に合わせてその自主性が尊重されるようになる。

ここに見られるリセ（lycee）は後期中等教育機関で日本の高等学校に相当する。リセの歴史は帝政時代の1802年〔国庫によって支持される中等教育機関〕として設立された時に始まる。

その後長くりセという名称は国立に限られ、公立はコレッジ、私立はエコー

ルと称されることになっていたが、後に一律にリセと呼ばれるようになった。1963年改正で以前の前期（4学年）、後期（3学年）を、前期過程が中等教育コレージュとして独立し、後期過程のみのリセが本流になり、別に技術リセも生まれた。



（資料4）ジャン・ペロー
 〈リセ・コンセルセの下校風景〉1903年
 （カルナヴァレ美術館 パリ）

ジャン・ペローのリセ・コンセルセの下校風景（資料4）は1903年の作である。校門の前と言っても日本の学校と異なり校庭はみられない。道路に面して直接校舎の入口があり、子供たちを迎えに来た両親が夫々我が子と一緒に帰宅していく。後期中等学校とくに高等教育進学につながるリセ進学者の中には恵まれた社会・経済階層出身者が多いと言われているが、作品の中でもシルクハット姿の父親や、華やかな衣装をまとう母親の姿が目につく。馬車も見えるがこれも子供を迎えに来たものであろうか。教育の結節の機関はP・ブルデューの指摘するように直接、間接に社会的階層とも結び付く。

（5）娯楽の結節機関

—エドゥアール・マネー 〈フォーリー・ベルジュール劇のバー〉—

一概に「娯楽」と言ってもその内容は多彩であり、時代によってもかなり異なる。

カフェが西欧の都市に出現したのは17世紀と言われるが、18、19世紀を通じて大都市や、地方の小都市でもその数を増し、新興階級になったブルジョア層

によって社交の場として愛された。チェスやビリヤードなどの遊び、競馬、観劇、文芸などを通じて彼等の絆が生み出され、常連が自然に集まりサークル化していった。マナー〈フォーリー・ベルジェール劇場のバー〉（資料5）の作品は、第二帝政期の1869年に開店したパリでもっと



（資料5）エドゥアール・マナー
〈フォーリー・ベルジェール劇場のバー〉 1881-82年
（ロンドン大学附属コートールド美術館）

も人気のあったカフェ・コンセールを描いたものである。女性バーテンダーの背後の鏡の中に当時の大規模なカフェのあり様や、社交界の様子が読み取れる。

近代は個の自由を確立したが、同時に日常生活における人と人との関係を変容していった。そのために人々は様々な葛藤を経験しなければならなかった。歓楽の巷には瞬時的な喜びや、スリルはあってもその裏に空しさや、不安が隠されている。G・ジンメル1903年のエッセイ「大都市と精神生活」（居安正訳「ジンメル全集」12巻 269頁～285頁 白水社刊 1994年）はこうした心情を的確に描いている。

マナーの本作品は論理的には理解しがたい画面構成にある。そこに近代の不確かさを感じる批評も一部に見られるが、果たして当時の人々、とくに大衆がそうした意識を有していたかは不明である。

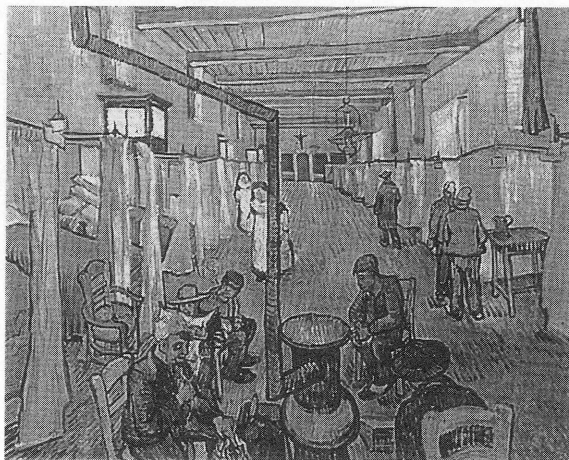
おわりに

都市結節機関説を参考に絵画作品を通じて西欧の都市の近代化について見てきた。絵画作品はイメージ的には言語的資料に基づくよりもより具体的に捉え

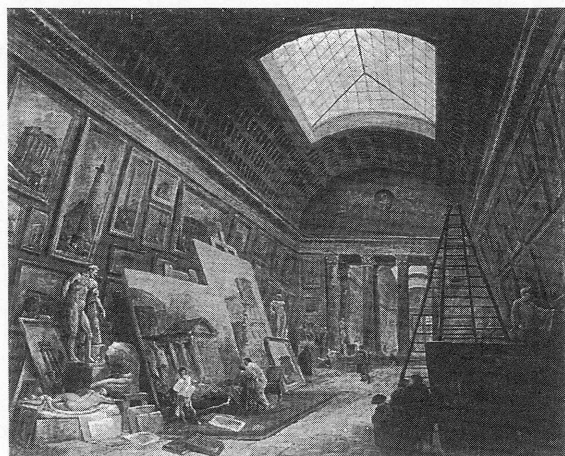
やすく、身近かに当時を知ることが出来るが、反面絵画作品では理解し得ない部分も多い。今後とも両者は補完的資料として活用していくことがより有効であることが一層実感出来たと言えよう。また「都市と近代化」の問題については、作品を通じて画家の都市に見られる近代化への歓喜・期待や、或いは憂愁・不安と言った心情を読みとることが出来る。

さらに鑑賞者は作品を通じて都市の当時と今日の状況との比較において近代化の意味を探ることも可能である。

そこには画家との同時代的視点と今日の視点、芸術的視点と歴史的視点が見られ、それらの視点の差が芸術社会学上興味のあるところでもある。なお結節機関説については鈴木説にはみられないが医療（現代的には福祉も含む）を別に加えることが、ゴッホ＜アルル療養院の内部＞（1889年—資料6）などの作品からも必要ではないかと考える。さらに芸術社会学の立場からはユベール・ロベール＜古代ローマ美術のギャラリー＞



（資料6）ファン・ゴッホ＜アルル療養院の内部＞1889年
（O・ラインハルトコレクション）

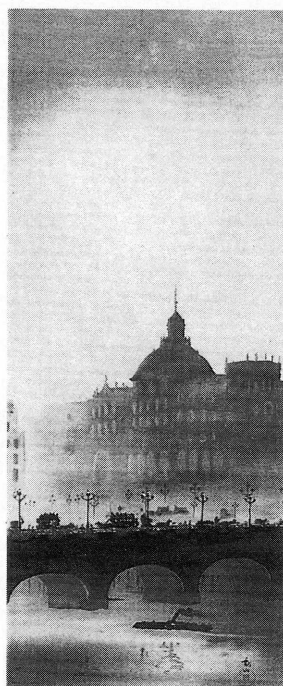


（資料7）ユベール・ロベール
＜古代ローマ美術のギャラリー＞1789年
（ルーブル美術館 パリ）

ラリー> (1789年-資料7) の作品などにより、文化施設の結節機関の追加を提案したいところである。

最後に西欧における都市の近代の模様を、その憧れとともに、日本画で的確に描いた一人の巨匠の作品、下村観山<倫敦の夜景> (M37年 (1904年) -資料8) を紹介して終わることにしたい。

(本稿②a W・ターナーの項には、本研究会報18号 (1998年5月) 掲載のエッセーと一部重複の箇所があります。)



(資料8) 下村観山<倫敦の夜景>明治37 (一九〇四) 年

引用・参考文献 (引用部分については本文中に明記)

- * G・ジンメル著・居安正訳 「ジンメル全集」12巻 白水社 1994年
 - * 倉橋重史著 「絵画社会学素描」 1, 2, 3巻 晃洋書房 1991年から1995年
 - * 倉橋重史・大塚晴郎著 「芸術社会学序説」 晃洋書房 1997年
 - * 鈴木栄太郎著 著作集6 「都市社会学原理」 未来社 1969年
 - * 神谷国弘著 「都市の社会構造と社会変動」 晃洋書房 1994年
 - * 神谷国弘 「都市的機関論再考」 関西大学「社会学部紀要」 第7巻第1号
 - * 朝日新聞社 「朝日百科 世界の歴史」 朝日新聞社 1991年
 - * 日本経済新聞社他編 「コートールド・コレクション展」 1997年
 - * 梅原龍三郎, 谷川徹三, 富永惣一監修 「現代世界美術全集」 集英社 1970年
- (おおつか はるお 仏教大学大学院社会学研究科博士課程)